

2014年5月28日(水)

ちよだプラットフォームスクウェア 001 会議室

- ◆ 委員長：中澤信夫 副委員長：金子純代（議長） 事務：熊谷一樹 加藤文弥  
書記：室橋亜紅子 中山遼平
- ◆ 出席者（順不同）：児玉萬平 斉藤威 古川龍文 上松慮生 山田寛 石黒建太郎 畠山智己 伊藝徳雄 浅野英彦 松本浩司 桑原啓三
- ◆ 開会 19:05
  
- ◆ セーリング企画支援
  - ・ 伊藝さんより、8/31の葉山マリーナYCのクラブレースに提案予定の計画にKBK委員会のバックアップ要請があった。
  - ・ ターゲットは、全くの未経験者ではなく、セーリングに現在も関わっている、もしくは過去に関わっていた人。例えば、学生時代にヨット部に所属し社会人になって海から離れてしまったが、また乗ってみたいなどと思っている人や、学生マッチに参加しキールボートに乗りたいたいが、きっかけがないと考えている人。
  - ・ 上記のような人達に声をかけ、クラブレース参加艇にそれぞれ1～2名乗艇してもらえよう働きかける。
  - ・ 懸案事項として、はじめてのキールボートで怪我をした場合、その責任を艇のオーナーに押し付ける訳にはいかないため、一案として、保険加入分を参加費として徴収することを検討している。
  - ・ 宣伝媒体として、FBやSNS、ヨット部などの横のつながり、学生マッチ出場者のネットワークを利用したい。
  - ・ ゆくゆくは同様の企画を関東だけでなく全国に広げていきたい。
  - ・ KBK委員会として、バックアップ及び後援に名を連ねることを了承。企画の経過及び結果についてKBK委員会で共有する。
  
- ◆ キールボートパーク（KB）構想
  - ・ リビエラからの要請もあり、リビエラに特化したKBパーク案を提案。特に、セーリングだけでなく、町全体を巻き込んでいく案を作成している。（中澤）
  - ・ 沖縄東海レース時に現地に行き、外洋沖縄保井会長、徳田事務局長、東江宜野湾マリーナハーバーマスター、及び幹部の方々と児玉常務理事、私でKBパーク構想の説明及び意見交換ができた。その感触として現地では、KBパーク構想自体にはたいへん興味をもっているが、現地関係団体は紹介できるがマンパワーが不足で現地ですべて企画運営することは出来ない。KB委員会をはじめとJSAF本部の支援協力を仰ぎたいとの事。今後どのような手法をとつ

- て立ち上げていったらいいか皆さんに広く協力を求めたい。(中澤)
- ・ 東京オリンピックマリーナの資料確認。日本のモデルヨットハーバーとなるものを作り上げて欲しい。2016年着工予定。ハーバーに関するアイデアは随時募集している。(斉藤)
  - ・ 沖縄レース参加時に各オーナーと話したところ、沖縄くらいまでであれば海外のヨットチームも来てくれる可能性があり、アジアサーキットの日本誘致を検討したいとのこと。(児玉)
  - ・ KBパーク構想とアジアサーキットのコラボが実現するようであれば、沖縄のポテンシャルもあがってくるのではないかと。(児玉)
  - ・ 確かにサーキット誘致は憧れのレースという位置づけとしてはいいが、まずは日本各地のレースに国内チームが遠征する動きを活性化させていくことが必要ではないかと。(山田)
  - ・ 昨年のタモリカップがいい例で、タモリという旗振りがいるだけで200艇集めてしまうというのは、現在のセーリング界の問題点を象徴しているように思われる。(伊藝)
  - ・ 新しいものを作り上げるよりも、現在あるものを大事に活性化させていくことがまずは必要だと思われる。現在活動している人たちのつながりを強くもち、まずは自分たちが楽しい、やりがいのあるセーリングを実現させるのが先決ではないかと。(伊藝)
  - ・ レースやランデブーといったクラス分け、家族向け企画などは盛り上がるのでは。(児玉)
  - ・ ジャパンカップの活性化は引き続き懸念事項。(児玉)

◆ 東京オリンピック開催に関する意見交換会

- ・ 東京オリンピックセーリング競技準備副委員長の桑原さんに来て頂き意見交換を行った。
- ・ 連絡担当・競技運営担当・施設会場担当として(桑原さん含む)3名を東京都組織委員会に登録済み。将来的にオリンピック組織委員会に吸収される予定。
- ・ セーリングは海面情報などの公平性を保つため、2018年に開催予定のプレプレ大会に向けて準備を開始している。
- ・ ロンドンオリンピックではレース運営専門のボランティアスタッフとして1200名が協力した(うち1100名は完全無償)。今年7月にはスタッフ募集を開始する予定。
- ・ 本大会まで長期間に渡りスタッフを育成するため、人材を集めて欲しい。
- ・ 建設予定のオリンピックハーバーに関する希望を東京都に伝えたい。
- ・ 1800ページあるロンドンオリンピック資料は、災害対応や運営配置など細部に渡る。
- ・ 長期間に渡るボランティアは企業の協力を受けないと難しい。ボランティア内容や育成期間に応じて、グループ分けしてはどうか。(石黒)
- ・ 現段階では具体的なスケジュールは不透明。前回の東京オリンピックでは自衛隊が運営協力したが今回は警備のみとなり、ボランティア協力が欠かせない。(桑原)
- ・ 県連、特別加盟団体などJSAF各組織に協力を仰ぐが、最終的には意志統一できる組織固めが必要。(児玉)
- ・ 本大会前に国際大会を招致し、スタッフ研修の機会としたい。(桑原)

- ・ 国内でオリンピック級のレース運営を統括できる人は限られている。まずはリーダーとその側近を確保しないとイケない。組織ごとに運営チームをユニット化し、できるだけ内部でストレスが生じないようにするべきではないか。（伊藝）
  - ・ リーダーを中心とする見える組織作りが大切。（中澤）
  - ・ 本大会では ISAF からコミッティーメンバーが派遣される予定。（桑原）
  - ・ 経験上、コミッティーメンバーは地元のエキスパートの意見を尊重するはず。（伊藝）
  - ・ レースのコンディション判断など選手のストレスをできるだけ少なくすることは、運営の必要手腕のひとつ。（伊藝）
- 
- ・ オリピックハーバーの緑化、クリーンエネルギー利用、海辺の公園といったイメージを提唱したい。（斉藤）
  - ・ 現在の若洲ハーバーはオリンピック後にどうするのか。将来的な財産を残すべき。オリンピック後のハーバー利用プログラム、インストラクターを含むプランを描く必要がある。（伊藝）
  - ・ 具体的に何を仮設とし、何をオリンピック後に残すのか検討していく。（桑原）
  - ・ 会場は若洲に決定しているのか。相模湾という案はないのか。（古川）
  - ・ 招致時に若洲でプレゼンを行っており、相模湾だと全て始めからになってしまう。（桑原）
  - ・ 海外では各ヨットクラブが矜持を持ち運営を行う。同様に日本でも団体ごとに人材募集してはどうか。（伊藝）
  - ・ 東京湾の帆走可能区域、レース向きの海面かなどを含めて、オリンピック後にどれだけ東京湾を活用できるか前向きに検討するべき。（山田）
  - ・ これまで東京には外部に対してオープンなハーバーがなく、学生なども気軽に活用できるハーバー環境ができれば前進ではないか。（桑原）
  - ・ 立派な建物は不要で、レースやイベント時にフネとヒトが集まるスペース、施設があればよいのではないか。トップシーズンとオフシーズンそれぞれの利用法なども考慮すべき。（中澤）
  - ・ 若洲は埋め立てによる泥土の問題もある。（児玉）
  - ・ オリピック後ハーバーの完全民間運営は経済的に難しいと考えられ、土地管理など一部は公共とした方がよいのではないか。ハーバースタッフは施設管理だけでなく、ボートの維持管理やインストラクターを兼任する。まずは 10 年間ランニングできる、プログラムと人材プランを練る必要がある。（伊藝）
  - ・ 若洲オリンピックハーバーを設計する上でモデルとするイメージは海外のどちらのマリーナなのか？（中澤）
  - ・ ロンドンオリンピック会場のウェイマスは新しく清潔だが施設自体は質素。一方でトレーニングなどに必要なものは揃っていた。オリンピック時の建物は現在分譲されている。（伊藝）
  - ・ 今後も定期的に東京オリンピックに関する意見交換を行いたい。（桑原）

- ◆ 閉会 21:25
- ◆ 次回委員会の開催日：未定。決定次第、web 公開及びメール配信します。